

遺伝子の命ずるままに

住吉高燈籠建立の奨め

竹
森
正
義



遺伝子の命ずるままに

住吉高燈籠建立の歴史

竹 杰林 正 義

五十年前、終戦の年の六月一日、二十六歳の誕生日に、家も病院も戦災で消失した。海軍軍医として、戦火と飢えに苦しむバラオ島にいた留守中のことである。

この島で多くの戦友を失った。また、グアム島では、陸軍軍医の兄も玉碎している。痛恨の極みである。

その年の暮、部下全員と九死に一生を得て帰還した。孤島で一年半ひどい食生活を送ったので、歯が弱り、次々歯を失つて、体調もどん底まで落ちてしまった。食の大切さを思い知らされた。

やがて、食の工夫と寡欲・簡素な生活で健康を回復し、今日まで息災である。名利に執われぬ自由な発想で、わが道を歩むことが出来た。却つて良かつたと思っている。

ところで近頃、幼いころのことが頻りに思い出される。ことに童謡がヒヨッコリ脳裏をよぎることが多くなつた。寝入りばなや起床前に、懐かしいメロ

ディーが次々と思い浮かんだり、歌詞を思い出そうと、夢うつつであれこれ口ずさんだりするのである。

去年の十月、昭和十八年京大医卒のクラス会が玉造温泉であり、翌日、出雲大社に詣でた。大社から観光バスで松江へ向かう途中、ガイド嬢の音頭でイナバノシロウサギを合唱した。

オオキナフクロヲ カタニカケ ダイコクサマガキ カカルト ココニイナバノシロウサギ カワヲムカレテ アカハダカ……。

最後のところを、私はマルハダカと大声でやつて了つた。忽ちガイド嬢が聞きとがめ、車中大爆笑となつた。

ペツタン ポツタン ヤレツケ ソレツケ コガネノウスニ ギンノキネ ツキマスオモチハ ジュウサン ナナツ……。

この歌も懐かしい。中秋名月の夜、幼稚園の藤棚の下で、紙で作つた兎の耳を頭に付けて餅つきの真似事をし、食べた白い団子。その滑らかな舌触りま

でが蘇り、実に楽しい。

記憶違いやアイマイさえも楽しさを倍加させ、五感の記憶が響き合って、更に増幅させて呉れるのである。

さて、昔々、竹森新右衛門の一族は、現在姫路城のある、姫山を含む播州平野の一角を占めて、農業を営んでいたが、嫡男新二郎は豪勇で、戦国時代の末、黒田官兵衛（如水）に従い、戦功を立てて九州福岡に移り、黒田藩で代々重用された。

その後裔で、数代前から筑前遠賀若松の里に住みついたのが、私の祖先である。

この地は遠賀川下流域にあり、昔は水陸交通の要衝であった。

若松の里の口、鳥見山の麓の川辺に、海を渡つて新羅を征した、神功皇后ゆかりの住吉神社が鎮座されている。そのすぐ前に家があり、祖父は毎朝住吉神社に参拝し、清掃を一日も怠らなかつたと古老たちは語り伝えている。

祖父竹森惣次郎が七十七、祖母倫子が六十六歳を迎えた時、父や伯父たちと計つて石の鳥居を宮川のほとりに建立、奉獻した。七十五年前、大正十年十月十七日のことである。

上梓した、記念文集『華表』の中の記念写真に小さく写っている。鳥居の前の最前列に、丸刈り頭の兄と私がチョコナンと坐り、妹が母の胸に抱かれている。祖父母、父、伯父たちは、私たちのうしろに礼装して並んで立ち、ほかに大勢の人々が写っている。この写真是、当時の竹森惣次郎一族全員の面影を伝える、恐らく唯一のものであろう。現存する者は数名に過ぎない。

私の遠い記憶に残る祖父は背が高く、背筋のシャンとした面長、白髪、無髭のおだやかな人である。

父啓祐は三男で、二十歳頃東京に出、いわゆる苦学の末医師となり、大阪で開業した。私たち兄弟四人は皆大阪生まれ、大阪育ちである。

子供のころ、初詣はいつも「住吉さん」に決まつていた。摂津の国一の宮住吉大社のことを、大阪では親しみをこめて、こう呼び慣わしている。遠く日本歴史の黎明期に創建され、記紀の神話に登場される海の神、底筒男、中筒男、表筒男の三神と、この神社を創建された神功皇后を祀る我が国屈指の大社である。末社は全国に二千を数える。私たちは参拝客で賑う表参道から本宮の前に進み、父に倣つて柏

手を打った。父の手は人並みはずれて大きく、素晴らしい音がするので、いつも感心したものである。

参拝を終えると、本宮のうしろを廻って千年を経た神木の大楠を仰ぎ、次に南へ廻つて御田を眺めた。父は若いとき農作業を手伝つた経験から、田畠に興味があるのか、この田は何段位などと目算しているのを覚えている。それから雑踏の間を縫つて西へ向かい、住吉公園を通り抜け、更に二、三百米行くと、木造瓦葺の昔の「住吉高燈籠」が初空に聳えていた。

その直ぐ近くに大阪湾に通じる水路がある。昔、この辺りまで海で、高燈籠は神前の燈明であると同時に、航海の安全のための燈台の役割を果たしていたのである。

父は、若いとき建築家になろうと思つたことがあり、住吉も象徴的存在であった、この歴史的建造物に特別の関心を抱いていたのであろう。初詣の度に必ず此処まで足を延ばした。

惜しいことに、この優雅な高燈籠は、戦後台風禍を被つて倒壊し、台座だけが残つていたが、道路拡張のため、それも取り払われて、別の場所に鉄筋コンクリート造りの昭和の高燈籠が立てられている。

私は、三十歳頃から長寿法の研究と実践に取り組み、文集『華表』の附録に、六十ページの「長寿の法」を載せている。その効験か、九十四歳まで産婦人科医の現役で、大阪府の医師中の最長老であった私も、弟も、二人の息子も同じく産婦人科医である。近頃、すること為すこと父に似て來たことを痛感している。遺伝子の為せる業であろう。

子供のころ、父は非常に恐ろしかつた。悪いことを見付けると忽ち、うちの子、よその子の別なく物凄い雷が落ち、震え上がつたものである。父の最も嫌悪したのは勝負事と買喰いで、友達は殆ど寄りつかなくなつた程である。

しかし子供が十八歳に達すると、小言や説教じみたことは一切言わず、むしろ自由放任に近かつた。陰では色々と心配して呉れていたのであろうが。父は、名付親医師の蘇我先生を尊敬していたので、医師を志したと、或医師会誌に書いている。少年時代にスマイルズの『自助論』を読んで、自助を生涯の信条とし、西郷南州の「児孫の為に美田を貢わず」を実行して私たちに自助を促した。こよなく郷土を愛し、小、中学校に自筆の扁額、ピアノ、図書などを惜し気もなく寄付し、修学旅行に来阪の児童生徒

を住吉大社へ案内し、学用品を配つたりした。酒たばこを嗜まず、簡素な生活を守つた。

幼時、初空に仰いだあの懐かしい住吉高燈籠を、産すなの住吉神社の前、父祖が寄進した石の鳥居近くに建てようと思い立つたのは三年前のことである。七十七歳を機に、平成の住吉高燈籠を父祖の地に第二号を寓居の庭に建てる決め、二、三の模型を作りした。

私が顧問を務める「暮らしが研究会」の代理理事 津島 素氏（ツシマ株式会社社長）、顧問の一級建築士新井律子氏（新井律子建築設計事務所主宰）と「竹森芸術サロン大手前」で会合して三人でプロジェクトチーム「ともしひの会」を組んで活動を始めた。

先ず、第一号、第二号を建立し、更に第三号以下の住吉高燈籠建立を推奨、支援しようというのである。

設計に当たつては、神戸市東灘区住吉町の石燈籠が多数、阪神大震災で倒壊したことに鑑み、地震、雷、火事、台風に強く、日本の風土に合った和風構造で、二百年以上の風雪に堪えることを目標とした。

「暮らし方研究会」（事務局 大阪市北区天満四一

二一十五）は平成四年秋結成された。

会員は、一級建築士・弁護士・医師等の公的資格を有する会員、陶芸家・木工家等の暮らしに潤いを与える特殊技能を持つ会員、住宅設備及び関連周辺機器メーカー会員、各地域の工務店会員から成り、見学会・セミナーの開催、PR誌の発行、顧客間のネットワーク、無料相談などの事業を活発に行っている。

その理念は、代理理事津島 素氏の発会式の挨拶に示されている。それは、「ともしひの会」の目指すところとも完全に一致している。

津島氏の『ごあいさつ』を要約紹介する。
「いま、人々は経済中心の行動と人間中心の生活様式から目覚め、自然環境や動植物との共存の大切さに気づきました。本質の時代、精神文化の時代へと、人々は還りはじめたのです。

私たちの暮らしは、余りにも物質文明化し、便利だ、奇麗だ、流行だから、と際限なくモノを求め続けてきたように思います。一昔前には、不便だがやすらぎと充実の暮らしがありました。

暮らしとは、自分の生活に独自の文化と伝統を持ち続けて生きることであり、住まいとは家族や友人

を大切にし、明日への活力とやすらぎを育む空間でなければならぬ、と考えております。今までの暮らし方に、本質的な価値観と精神文化主体の生活様式を導入し、自分流に生き、忘れかけている心のやすらぎを取り戻すことを目的としております。…」

平成の住吉高燈籠第一号は、「ともしひの会」の検討を経て優雅、雄勁、素朴、更に災害に堪え得るよう入念に設計された。

施工を、宮大工の経験豊かな石橋工務店（石橋実社長）に依頼し、第一号を、木造、銅板葺き、銅板張りとして、去る十一月二十一日棟を上げることが出来た。日曜大工で作った第二号も奇しくも同日棟を上げた。

戦後五十余年、産婦人科の診療を本業として、今日に及んでいる。いつの頃からか、芸術に心惹かれ、数々の趣味道楽に心を遊ばせ、いま、彫塑と建築と歌唱と呼吸法に最も魅力を感じている。

身体をうごかすことが大好きで、西野流呼吸法を十年近く続け、今では「氣」を使えるようになつてゐる。年々老化は進むが、氣力はむしろ充実している。十余年来「竹森芸術サロン大手前・竹森健康サ

ロン大手前」を拠点に、種々のボランティア活動を行つてゐる。これらの経験を生かしてなるべく早く、私流のささやかな「彫塑園」と「創健塾」を、父祖の地に開きたいと思っている。

七十七年のわが歩みを振り返り、行く末を思うとき、年の功であろうか、自分の姿がはつきりと見える。遺伝子の命するままに、父祖の志を具現しようと、ひたすらに生きる自分の姿が。恐らく人皆、いじらしくも斯く生き、伝え、老いて代を重ねるのであろう。

曾て海軍軍医であつた私にとつて、住吉高燈籠は、あたら若い命を祖国に捧げて海に散つた、忘れ得ぬ多くの戦友たちの魂魄を鎮めるよすがでもある。海国日本の風土が生んだこの灯明ほど、彼らの慰靈に相応しいものはほかにあるまいと思うからである。国籍不明の照明が氾濫し、「ともしひ」が影をひそめている今こそ、心ある人々によつて、住吉高燈籠が津々浦々に建立され、平和の灯が点されることを願つてやまない。

「ともしひの会」の私たち左記の三人は、住吉高燈籠の建立を推奨、支援する体制を整え、常時待機している。

竹森 正義

医学博士

日本医家芸術クラブ会員

百齡健康友の会理事

◇医療法人産育会竹森産婦人科

理事長・院長

大阪市東成区大今里三一二一ー一六

電話 ○六一九七一ー三三一九〇

◇竹森芸術サロン大手前

竹森健康サロン大手前

大阪市中央区大手前通一一四一七

大手前ガーデンズ二階(二七・一八号室)

津島 素

◇暮らし方研究会 代表理事

大阪市北区天満四一二一十五

電話 ○一二〇一ー一六五八四

◇ツシマ株式会社 代表取締役

大阪市北区天満四一二一十五

電話 ○六三五六七三三一
06-6356-7331

新井 律子

一級建築士

◇新井律子建築設計事務所 主宰

大阪市中央区今橋二一一一

電話 ○六三五六七三三一
06-6356-7331

06-6222-1805

